

<p>活動タイトル</p>	<p>子どもが“輝き”をとり戻す居場所づくり</p>		<p>団体名</p>	<p>NPO法人 子どもNPOセンター福岡</p>		
<p>1年間の活動 (アウトプット)の 目標 (事業全体)</p>	<p>1. 実行委員会の設置と運営 (期間内6回開催) 主に全体のプログラムの企画・調整を行う。 2. 子ども対象のワークショップの開催 (期間内6回開催) クリエイティブドラマの手法を用いて、全6回の中で、子どもたちの声をつむいだストーリーを作っていく。地域への理解を広げるため、最終回に成果発表会を実施。 3. 大人対象ワークショップ (期間内2回) コミュニケーションワークの手法や、子ども主導でのワークに必要な考え方やスキルなどを学ぶ。 4. スーパービジョンの実施</p>			<p>■活動風景</p>		
	<p>■活動報告</p> <p>虐待などの背景で親と暮らせない子どもたち、また、いじめや不登校など、さまざまな状況の中で苦しんでいる子どもたちの、自己表現とコミュニケーションを育成し、困難を乗り越える力を培うこと、またその指導者となる人材の育成をめざして以下の活動を行った。来年度以降、県内の複数の場所に広げていくためのモデル事業とし、それに関わるインストラクターの養成もめざした。</p> <p>1.実行委員会設置と運営 (委員6名 5回実施11/15, 2/15, 3/19, 4/19, 6/25) 参加地域の選定、全体プログラムの企画・調整を行った。</p> <p>2.子ども対象のワークショップの開催 (6回実施 3/30, 4/13, 14, 20, 27, 28) 社会的養護の子どもたちを含む、幅広い年代(3歳～小学6年生/計12名) の子どもたちのニーズに合わせ、体を使ったワークやお話づくりを行った。 最終回は、保護者を観客として、ドッチボールや格闘技をモチーフにしたコミュニケーションワークを実施した。 * 初回と最終回に、描画 (HTP) テストによる、子どもの心理状況の観察・比較を行った。加えてクレパス画にも取り組んだ。</p> <p>3.大人対象ワークショップ (1回 3/9 参加15名) 子ども支援に関わる大人を中心に、コミュニケーションワークの手法や、子ども主導に必要な考え方やスキルを学んだ。</p> <p>4.スーパービジョンの実施 (1回 4/14 参加7名) 参加した子どもたちの保護者を対象に、子どもの表現をどうとらえるか、子どもたちひとり一人の違いを認めながら、どうサポートしていくかを学んだ。</p>	<p>■1年間の目標に対する達成状況</p> <p>目標：福岡県内の複数の居場所でのドラマワークの実施をめざして、モデル事業を行う。それに関わるインストラクターの養成をめざす。</p> <p>モデル事業としての成果 ・子どもの表現開放の手法と、それを支える大人の考え方やスキルについて学ぶことが出来た。</p> <p>・サポーターとして関わった青年4名は、コミュニケーションワークショップの経験者で、参加者である子どもと大人の間をつなぐ要となる役割を担い、子どもの表現の開放に大きな役割を果たした。今後、講師の元で、インストラクターとして関われる可能性が見えた。</p> <p>・描画テストでは人物像の変化が多くみられ、このワークが対人関係の認知の改善に役立つのではないかと考えられた。</p>	<p>見えない縄を 想像して縄跳 びに挑む</p>			
	<p>■1年間の活動のまとめ</p> <p>・幅広い年代の子どもたちの参加があり、異年齢かつ学校や住んでいる地域も違う中で、一ヶ月という短期間の中でも子どもたちの変化を目の当たりにできた取り組みであった。 ・どんなに小さな子どもであっても、きちんと意見を受け止められる場であるか否かということ子どもは敏感に察している。そして、受け止めてもらえることが分かるとつばさに変化していくということが、保護者の「あんな顔するんですね」というつぶやきにも表れている。 ・社会的養護 (里親ファミリーホーム、児童養護施設) の子どもたちが、全体を通して主体的に参加してくれた (3年～6年 = 4名 幼児1名) ・様々な背景を持つ子どもたちが集う中で、それぞれの子どもの継続的な変化を受け止める存在を、大人側がどう保障していくかが今後の課題となった。 ・来期に向けては、児童養護施設を中心に、この取り組みが継続されていくよう、財政的な裏付けも含めて検討中である。</p>	<p>■事業を通して得られたノウハウ</p> <p>○企画プログラムについて 大人がプログラムを作りこむのではなく、その時の子どもの反応や発した一言をヒントに場を作っていく方法について学ぶことができた。ポイントは、子どものニーズをつかむ・強制はしない (やりたい人だけで) ・子どものやりたい気持ちを待つ・からだを使ったあそびを連動させながら、創造 (お話づくり) あそびへと発展させていくことなど。</p> <p>○事業の評価指標について 参加人数や回数だけでなく、子どもたちの内面の変化をつかむ方法として、HTPテストなどの手法があること、その実践方法が分かった。</p> <p>○子どもたちの年代に応じた配慮について 子どもの年齢や発達段階に応じて、理解度や集中力に差があることから、前半を幼児も含めた全員、後半は小学校2年生以上とするなどのプログラム設計を講師のアドバイスを得ながら実施することができた。</p>	<p>■実施した人材育成策</p> <p>○子どもの表現活動を支えるインストラクターの養成</p> <p>・講師が行っているインプロワークショップに関係している若者たち3名の主体的な関わりがあった。ワークの実施や振り返りを彼らと共に丁寧に行うことで、これらの人材が今後インストラクターとして発展していく可能性が感じられた。</p> <p>・子どもの表現活動を理解し推進していく人材 子どもの保護者を中心として、ワークショップへの参加や児童保育の専門家からのレクチャーを受けることにより、子どもの表現の持つ意味や大切さについて理解を持つ人材を増やすことができた。</p>	<p>■活動成果のアピールポイント (自由記入)</p> <p>この1年間の活動を通じて</p>	<p>子ども主体のワークに対する深い理解と、ワークによる子どもの対人認知の向上</p>	<p>を達成しました。</p>
			<p>■受益者の変化 (効果測定結果等)</p> <p>・子どもたちの変化について、初回および最終回に描画 (HTP) テストを行い、専門家による数値化、分析を行った結果、ワーク前とワーク後では、良い変化のあった子どもが12人中7人となった。H(家)T(セルフイメージ) P(対人認知)の内、対人認知のよい変化が最も多くみられた。 ・実行委員や大人の参加者は、子どもの表現をどう捉えるか、子どもひとり一人の違いを認めながらどうサポートしていくかを実践の中で学ぶことができた。それにより、新しい知識を身に着けたり、これまでの知識がより説得力を持つものになったり、これまでよかれと思っていたことがそうではなかったことに気付いたりする参加者の変化が見られた。終了後、日々の子どもとの関わり方や、子どもの行動に対する柔軟性が向上したとの声も複数聴かれた。</p>	 <p>描画 (HTP) テストの風景</p>		